

# 冬の観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

令和五年三月二十五日(土曜日) 午後二時三十分開演

## 狂言 成上り(なりあがり)

鞍馬の多聞天に通夜する主人は太郎冠者に太刀を持たせて共にまどろみます。そこへ初寅(正月最初の寅の日)の大参りをあてこんだすっぱ(自称「心の直にない者」)が来て、太郎冠者の持つ太刀をその辺で捨てた青竹とすり替えます。明け方、下向する主従は太刀を泥棒に奪われたことに気づきます。太郎冠者は太刀が青竹に成り上がったと言いつくす際、いろいろ成り上がりの例を並べます。能(山姥)の間狂言が連想されるところです。主従は徘徊する泥棒(主人の言葉では「いたずら者」)を待ち伏せして、主人が後ろから泥棒を羽交い締めにします。それからやおら、太郎冠者が縄を綱ない始めます。その上、縄を後ろから泥棒に掛けたつもりが、縄は主人に掛けていました。

## 能 養老(ようろう)

美濃の国本巢の郡に不思議な泉が発見されたのは雄略天皇の御代のことです。さっそく勅使(ワキ・ワキツレ)が派遣され、養老の泉のいわれを尋ねます。養老の滝のほとりに現れた親子(前シテ・ツレ)は、養老の泉の水を山仕事の帰りに息子が見つけ、老いた父母に与えて老いを養う薬とし、おかげで心清らかに齢も延びたと穏やかに語ります。親子は滝壺近くの霊泉に勅使を案内して(養老の滝と養老の泉は別物です)、帝の治世を称え帝の寿命が尽きないよう薬の水を捧げることになります。水の奇端や酒の仙徳に思いをめぐらし、袖を濡らして水を汲む老人が、水鏡に映る姿の若やぎを喜んだ後、天上からは光と花と音楽が降り注ぎ、滝の響きも清澄さを増します(中入)。やがて男体の山の神(後シテ)が颯爽と影向し(前シテの老人と後シテの山の神は別人です)、神仏は御代を守り衆生を救うのだといって、諸天の来御に耳を澄ませ神舞を舞います。山の井(養老の泉)の水は千年の松の緑を映し、滔々として尽きません。山の神は善き御代の万歳の栄えを祝福して帰ります。(西村 聡)

前シテ(老翁) 面(小尉) 尉髪 小格子 白大口 水衣 腰帯 扇

後シテ(山神) 面(邯鄲男) 黒垂 鉢巻 透冠 厚板 白大口 狩衣 腰帯 扇